



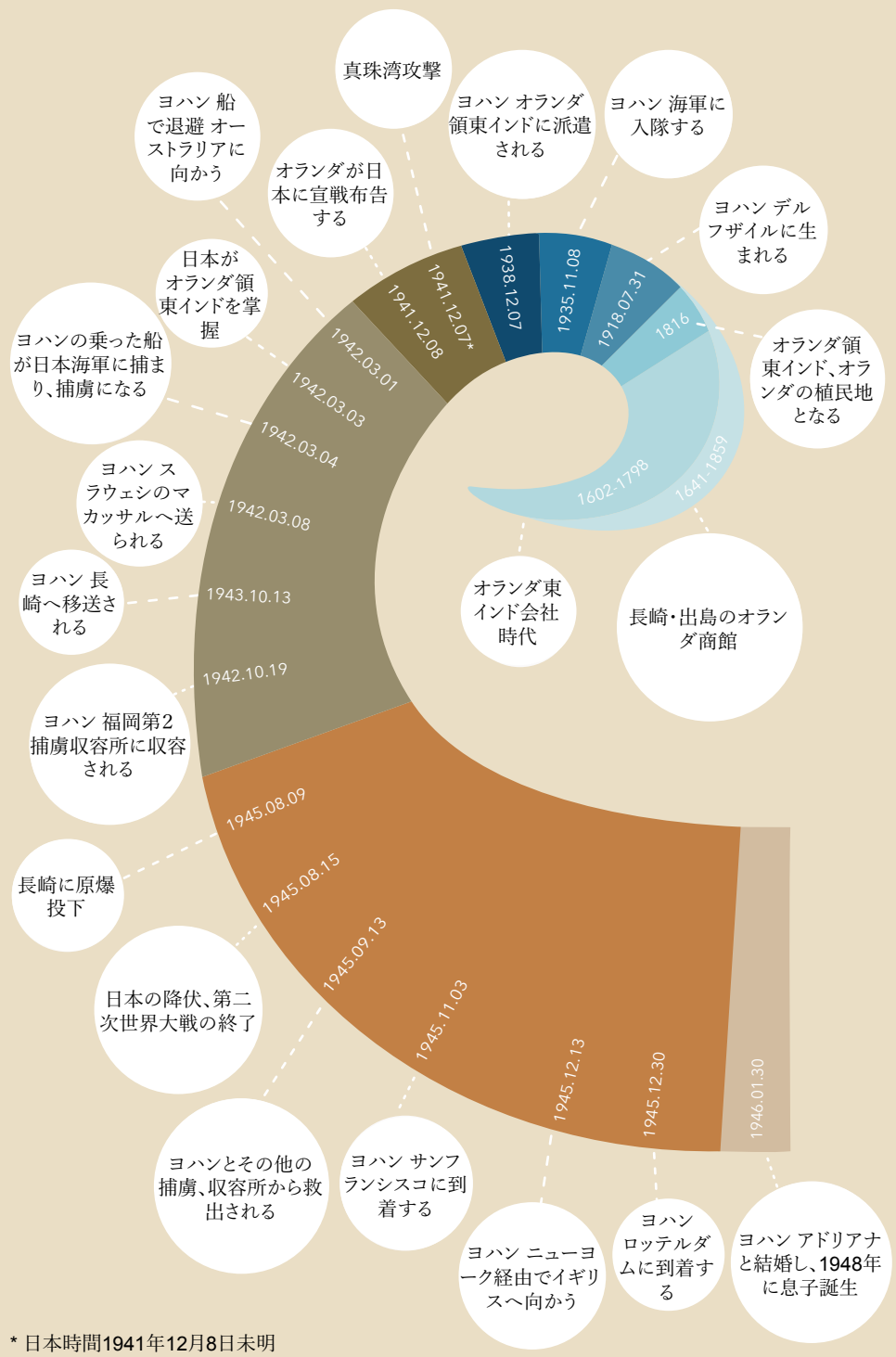
ヨハンの物語

3年間無理やり日本に 連れて来られたオランダ兵の話

アンドレ・W・スクラム
中沢陵子訳

かつてオランダの植民地であったオランダ領東インドとアジアにおける
第二次世界大戦の経過及びその余波について、
全ての方に読んでいただける内容になっています。
この教材では、戦争中に捕虜として長崎に送られて、
そこで3年間強制労働につかされ、原爆投下を経験し、生きのびた
若い海軍兵の物語を通してこの時期の歴史が語られます。
そして最後に、本書に書かれたような出来事を乗り越えていく
過程や追悼することについても取り上げています。
協力：タンゲナ鈴木由香里、ヨアン・スネレン・ファン・フォレンホーベン

日蘭イ対話の会



ヨハンとは？

ヨハン・ウィレム・スクラムは1918年にオランダ北部のデルフザイルという町で生まれました。彼はマース川、ライン川、ワール川などの内陸水路を通してオランダやベルギー、ドイツに荷物を運ぶ船乗りの息子として育ちました。

幼い頃はヨハンも両親と一緒に船に乗っていましたが、やがて学校に行かなければならない歳になりました。ヨハンはフレースウェイクというところにある、船乗りの子供たちのための学校に行くことになりました。ヨハンはこの学校で授業を受け、学校の寮で暮らしました。両親が近くにいる時や学校が長期休暇の時は、ヨハンも船で生活しました。

ヨハンの両親には彼を進学させるお金がなく、またヨハンも内陸水路の船乗りになるのは気が進まなかったため、1935年、17歳の時にオランダ海軍に入隊しました。水兵となったヨハンは、船に乗って新たな世界を見たいと思っていました。



オランダ海軍の町デン・ヘルダーでヨハンはアドリアナと出会い、二人は恋に落ちました。しかし、1938年にヨハンは海軍の任務で数年間オランダ領東インド(現在のインドネシア)に派遣されることになってしまいました。二人は婚約こそできましたが、ヨハンはそのあとすぐ出発しなければならませんでした。二人は、1942年にヨハンがオランダに戻った時に結婚する約束をしました。ですが、事態は思わぬ方向に進んでいきます……。

ここでまず、オランダ領東インドと日本について少し学び、その後でまたヨハンの話に戻しましょう。



オランダ領東インド

現在のインドネシアは、かつてはオランダの植民地でした。

インドネシアは約2万の島からなる群島国家で、何千年にも渡る豊かな文化文明を持つ国です。インドネシアで発見された最も古い人類の骨は、約150万年前のものです。西ヨーロッパはまだ厚い氷に覆われていた頃です！

16世紀の終わりに、最初のオランダ人が東インド（現在のインドネシアの旧称）の地にたどり着きました。ここではナツメグ、シナモン、こしょう、クローブ等の香辛料が栽培されており、これらはオランダに豊かな財をもたらしました。この頃の東インドは中央政府によって統治された統一国家ではなく、ほとんどの島にその島を統治する者が存在する、島々の集合体でした。

スペイン、ポルトガルやイギリスといった国もこれらの香辛料で利益を上げたいと考えていました。オランダでは1581年に「ネーデルラント連邦

共和国」が成立しました。共和国は7つの州からなり、それぞれ独自の政府（統治者）を持ちながらも協力しあう体制を築いていました。各州の統治者たちは貿易商人たちと連携することを決め、1602年に「オランダ東インド会社（VOC）」が設立されました。これにより、オランダは東インドで貿易を行う他国に対抗する力を強めることが出来ました。

VOCは、南アフリカの喜望峰より東における貿易の独占権を共和国から与えられました。この中には東インドも含まれます。加えて、条約の締結、要塞の建設、さらに貿易拠点を作り、それを防衛するために他の植民地国家の商人相手に武力を使用する権限まで与えられました。そして、VOCはこの権限を大規模に行使したのです。



出典: Clockwork Orange (ウィキペディア)

香辛料が他国の商人と取引されるのを防ぐため、などの理由で、VOCはモルッカの北部にあるテルナテ島やバンダ諸島など、広範囲にわたる地域を占領しました。これらの島々はモルッカ諸島の一部であり、当時世界で唯一ナツメグが産出される場所でした。

しかし、1621年に秘密裏に他国との取引が行われると、VOCは現地の人々の大半を殺害しました。これは、現代の言葉でいう「ジェノサイド（民族虐殺）」にあたる行為です。生き残ったわずかな人々は、バタビア（現在のインドネシアの首都ジャカルタ）の奴隷市へと連れて行かれました。その後はインドやアフリカで奴隷にされた人たちがテルナテ島やバンダ諸島に連れてこられ、VOCのプランテーションで働かされました。

VOCはその後も武力を行使しながらアジアやアフリカの各地に貿易拠点を設立しました。またバタビアは、アジア、中東、アフリカ、ヨーロッパを結ぶ貿易の拠点へと発展しました。VOCは、インドの綿織物、スリランカの象、ジャワの競走馬、中国の茶、日本の漆器や銀など、さまざまな品物をこれらの国々の間で取引していました。

奴隷貿易

1500年代の初めから、主にスペインとポルトガルによって海を渡る奴隷貿易が本格的に始まりました。奴隷とされたアフリカの人々は売買され、南アメリカや特に北アメリカで、主にプランテーションで強制労働をさせられました。オランダ人も次第に奴隷とされた人々の取引に関わるようになりました。その規模は非常に大きく、数百年の間に何百万もの人々が奴隷として売買されました。

当時VOCはこの大西洋を横断する奴隷貿易に積極的には関わっていませんでしたが、アジアにおける奴隷貿易には関与していました。



出典: 大英図書館

オランダ東インド会社(VOC)が設立した貿易拠点の数が増えるにつれ、1600年以降、奴隷の需要も高まっていきました。VOCは主にアジア(特にインド)やアフリカから奴隷を連れて来ました。また、17世紀から18世紀にかけてVOCが東インドで繰り広げた戦闘においても、奴隷は戦利品として扱われ、自由を奪われただけでなく、時には家族や子供とも引き離されたのです。

奴隷は要塞の建設、港湾での労働、プランテーションでの農作業に従事させられました。また、家の使用人や職人として働かされることも多くありました。VOCは17世紀から18世紀の間に、およそ100万人の奴隷を輸送・売買しました。また、VOCの職員が奴隷の売買をすることもあり、彼らはそれを副収入とみなしていました。

オランダ領東インドにおける奴隷制度は1860年から段階的に廃止されました。まず大きな島であるジャワ島とスマトラ島で廃止され、その後オランダ領東インド全域で廃止されました。全ての地域で奴隷制度が完全に廃止されたのは、1914年になってからでした。

東インドからオランダ領東インドへ

1798年に貿易会社「オランダ東インド会社(VOC)」が解散し、オランダ国家がVOCの資産と負債の全てを引き継ぎました。VOCは、貿易の不振、財務管理の不備、そしてイギリスとの海戦の影響などで、随分前か

ら経営が悪化していました。

その後、1810年にイギリスがモルッカ諸島を占領し、さらに1811年に東インドの大きな島であり、多くの貿易拠点と重要な港町であるバタビアのあるジャワ島を占領しました。1816年、イギリスはこれらの植民地を再びオランダに返還し、こうして「オランダ領東インド(蘭印)」が誕生したのです。VOCの資産と権益を引き継ぐため、「オランダ商事会社」が設立されました。

オランダ領東インドの総督府(植民地政府)は大掛かりな税制を導入



オランダ軍人と蘭印人の妻

出典:ウィキメディア・コモンズ/アムステルダム世界博物館所蔵

し、また現地住民に対し、彼らの土地の一部を使ってヨーロッパ市場向けの利益の高い作物を栽培することを強制しました。しかし、オランダ領東インドの全ての地域が総督府に従順だったわけではありませんでした。オランダが強力な武力を行使しながらオランダ領東インド全体を完全に掌握したのは、1914年になってからでした。

1860年以降コーヒー、タバコ、茶、キニーネ(マラリアの特効薬)、ゴムなどのプランテーションが登場したことにより、繁栄がもたらされるようになりました。また、1869年にスエズ運河が開通したことや、帆船に代わる蒸気船の導入といった技術革新も繁栄に寄与しました。これにより、多くのオランダ人がオランダ領東インドへ移住し、そこに設立されたオランダ企業で働くようになりました。

また、学校、道路、病院、ホテルなども建設されましたが、これらは主にここに住んでいた、仕事や家族訪問のためにここを訪れる多くのオランダ人向けのものでした。

オランダ商事会社によって得られた莫大な利益は、オランダ国内における大規模なプロジェクトにも使われました。例えば、アムステルダムからハーレムへの最初の鉄道路線の建設などです。私たちは、この莫大な植民地からの利益は現地の人々の犠牲の上に成り立っていたことを認識しなければなりません。現地の人々は、飢餓や強制労働によって大変な苦しみを受けていたのです。

オランダ人がオランダ領東インドに初めてやってきた時から、オランダ人男性と現地の女性との間には、望まれた関係も強制された関係も生まれました。



バタビアに到着した蒸気船

出典:ウィキメディア・コモンズ/アムステルダム世界博物館所蔵

このような関係から生まれた子供たちは、アジアとヨーロッパの両方にルーツを持つ新しい社会集団「蘭印系オランダ人」を形成しました。さらに、オランダ領東インドにはオランダ以外の国籍の人も移り住むようになり、特に大都市では住民の多様性が顕著になりました。しかし、それと同時に大きな不平等も存在していました。1854年の「蘭印統治法」ではオランダ領東インドの住民が大きく三つのグループに分類されました。最上位には「ヨーロッパ人」が置かれ、その次に中国人やアラブ人などの「異国の東洋人」が続きました。そして最下位に現地の住民が位置づけられました。(蘭印系オランダ人のような)複数のルーツを持つ人々は、どのグループにも属さない「中間グループ」となりました。

ヨーロッパ人を最上位に置き、先住民を最下位に位置づけるという住民の分類は、信仰や人種に基づく「アパルトヘイト」の一形態といえます。この差別のため、繁栄や発展の恩恵は住民に公平に分配されず、しかも第二次世界大戦直前までは多くの人々が政治について意見を述べることも出来ないでいました。

こうした不平等の中で、現地の人々の間にオランダから独立したいという願いが次第に高まっていったことは理解に難くありません。この独立への道のりと、それに至るまでの出来事については後ほど説明します。その前に、ヨハンの話に戻しましょう。



逃亡
ジャワ人カサン、妻と子ども2人
年齢:35歳 身長:161 cm 特徴:左目を失明

1900年頃の東インドの新聞「デリ・クラント(Deli Courant)」の広告

ヨハン オランダ領東インドへ

ヨハンは1939年に大型客船クリスティアン・ハウヘンス号に乗ってオランダ領東インドに到着し、海軍の艦艇に配属されました。

ヨハンにとって、家からこれほど長く、またこれほど遠く離れるのは初めてのことでした。広大な海を航海しながらする船での仕事や、オランダ領東インドの熱帯気候はとても気に入りました。婚約者のアドリアナや家族と遠く離れているのは寂し

かったですが、これも「たった」3年のはずでした。ですが、それがずっと長くなってしまうとは・・・!

当時、ほとんどの人は気づいていませんでしたが、日本もオランダ領東インドに関心を持っていました。東インドは鉱物、ゴム、そして何よりも石油といった資源が豊富だったからです。そして、これらは日本にとってはのどから手が出るほど欲しいものでした。



東インドでヨハンが勤務していた船、ウィッテ・デ・ウィット号
出典:ウィキメディア・コモンズ/オランダ軍事史研究所画像データベース

日本

日本は太平洋にある東アジアの島国です。四つの大きな島と数千もの小さい島々からなります。



出典: ウィキメディア・コモンズ Japan World Map

「日出ずる国」とも呼ばれる日本は、長い歴史を持ち、現在世界で唯一「エンペラー」がいる国です。

日本の国土の大部分は山地であるため、農地や居住地として適した土地はあまり多くありません。また、日本には天然資源が少なく、そのため海外からの輸入に依存しています。

日本は火山活動が活発で、小さな地震が頻発し、大きな地震が起きることもあります。日本で最も高い山である富士山は標高が3776メートルあり、日本の文化において重要な役割を果たしています。日本人にとって富士山は神聖な存在であり、その

ため日本の絵画にもよく描かれています。

日本の歴史はいくつかの時代に分けられます。そのうちの一つ、江戸時代(1603年～)には、オランダが重要な役割を果たしていました。この時期日本は鎖国政策をとっており、誰も日本に入国したり日本から出国したりすることができませんでした。また、日本に西洋、特にキリスト教の影響が及ばないよう、外国人と接触することも禁じられていました。それだけでなく、日本は東南アジアの他の地域、例えば東インドのように植民地化されることを恐れていました。

すでに1543年には最初のヨーロッパの船が日本に到着していました。ポルトガルの商人たちが長崎に上陸し、その後オランダやイギリスの船も日本へとやってきました。彼らは警戒されながらも日本への入国を許可され、長崎の平戸に商館を設立することが認められました。

しかし、日本の支配者たちは、特にポルトガル人による宣教活動により日本でキリスト教信者が増えていることを問題視しました。その結果、ポルトガル人は日本から追放され、貿易は長崎に人工的に作られた小さい島、出島へと移されました。オランダはヨーロッパの国として日本と貿易ができる唯一の国となりました。オランダだけではなく、日本に隣接する中国や朝鮮も日本との貿易を許可されていました。

約250年の間、日本の人々は世

界から隔離されていました。そのため、日本の外で起こった多くの出来事、例えば産業革命などは、日本社会にほとんど影響を与えませんでした。産業革命とは、18世紀半ば以降の産業界で機械化が進んだ時代のことです。出島は、日本にとって西洋の革新を垣間見ることができる唯一の窓口でした。この時期、一部の優れた知識や高い教養のある日本人は、出島を通じて西洋の知識を熱心に学びました。

例えば、西洋の書物、科学、技術には早い時期から強い関心があった。特に医学、数学、化学、軍事などの分野が注目されました。オランダは、自国の貿易を守るためにも、日本に対し喜んで知識を提供しました。このようにしてオランダは日本の発展に貢献したのです。



オランダの旗が掲げられた出島

出典: ウィキメディア・コモンズ / 川原慶賀

日本がアメリカの軍艦に強制され再び開国したのは1854年になってからでした。日本は長い間外国からの影響を排除していたため、産業や近代技術の分野での発展に追いつく必要がありました。いくつかのヨーロッパの国が日本が望む近代化の進展を支援しました。オランダは主に造船技術や水利工学の分野の豊富な知識で貢献しました。

過去150年の間に日本は何度か大きな戦争をし、その相手は主に中国でした。

日本は依然として西洋の植民地支配を受けることを恐れていました。1854年以降、日本は自らが列強の一員となることを目指し、強力な軍隊と近代的な産業を発展させました。これにより、二つの大きな問題が生じました。それは原材料の不足と、生産した製品の販路の不足でした。



日本はこの問題を解決するため、かつて西洋諸国が行ったように、アジアの広大な地域を自国の勢力圏に取り込むためにそれらの地域を日本の植民地として併合しました。アジアの国々は日本の軍事力には太刀打ちできなかったのです。

1894年に「日清戦争」が勃発しました。この戦争は短期間(1895年まで)で終わり、主に朝鮮の支配をめぐるものでした。次の戦争は「日露戦争」(1904年～1905年)で、これも日本が勝利を収めました。結果として、日本はこの二つの戦争により朝鮮、台湾、そして満州の広大な地域をその支配下に置くこととなりました。これらの戦争を通じて、日本は欧米列強と肩を並べられる強大な国家に成長したことを証明しました。

「日中戦争」(1937年～1945年)は、中国の支配権を握り、すでに占領していた領土をさらに拡大すると

いう目的から生じました。その結果、激しく残忍な戦いが繰り広げられました。南京では、日本軍による占領後、略奪や殺害、放火など数え切れないほどの犯罪が横行しました。この戦争では中国の民間人や兵士1000万人以上が命を落としました。

こうした暴力的な領土拡大についてのニュースはアメリカにも伝わり、大きな怒りと強い非難を引き起こしました。これにより、日本に対して次の章で述べられるような制裁措置をとることになりました。

しかし、それまでの戦争の勝利は、日本軍の無敵の力を信じる熱狂的な考えを日本国内に生み出しました。これが後に、アジアにおける第二次世界大戦の始まりとなる1941年の真珠湾攻撃(後述)につながる要因となりました。

日本との戦争

1929年に始まった世界恐慌は、日本にも大きな影響を与えました。

日本では貧困が深刻化し、原材料の不足も大きな問題となっていました。この問題を解決できない政府に対し国民は不満を持つようになりました。軍幹部の一部はこのような社会情勢を利用し、過去の華々しい戦勝を引き合いに出して国民を欺こうとしました。加えて、兵士の多くが国民のおよそ半数を占める貧しい農家の出身であったことから、軍は国民の支持を得るようになりました。多くの利益を得ようとした産業界の指導者たちも軍部を支持しました。

そして、軍部中心の政府を作ろうとした一部の軍人により、当時の首相が暗殺される事件も起きました。

このようなことが1930年代初頭に起こったことにより、日本における民主主義は実質的に終わりを迎え、日本軍は日本が主導する「アジア人のためのアジア」を目指して準備を進めました。

ヨーロッパで進行していた第二次世界大戦とドイツによるフランス占領は日本にとって有利に働き、日本は1940年から1941年にかけて、フランス領インドシナを支配下に置くことに成功しました。ここで言うインドシナとは、現在のベトナム、カンボジア、ラオス、そしてタイの東部を指します。



真珠湾攻撃

出典：アメリカ議会図書館版画写真部

アメリカやその他の西欧列強はこの動きを強く懸念し、日本がさらなる領土拡大を目指すのではないかと警戒しました。

戦争を避けるため、アメリカは交渉を望んでいました。しかし交渉はうまく行かず、アメリカは1941年にイギリス、オランダとともに日本への鉾石や石油などの供給を削減し、最終的には停止するといった制限措置をとることにしました。これに対する日本の反応は予想外のものであり、世界中に衝撃を与えました。

真珠湾攻撃(ハワイ)

日本はまずアメリカの艦隊を排除することにしました。その戦略は明確でした。日本がハワイでアメリカ艦隊を無力化することができれば、南方への道が開かれることになるのです。その頃、オランダ領東インドやイギリス領のシンガポール、マレーシアへと進出できるようになるのです。その頃、オランダとイギリスはドイツに対する防衛に追われ、それに手一杯の状況でした。

アメリカ海軍は第二次世界大戦が始まる直前に、太平洋にあるハワイ諸島の島の一つに多くの軍艦を集結させていました。これは日本にとって、アメリカ海軍に奇襲攻撃を仕掛け、大打撃を与える絶好の機会であり、日本はこの機会を逃しませんでした。

1941年12月7日の朝(日本時間12月8日未明)、日本は真珠湾攻撃を開始しました。この攻撃は世界中

を驚かせ、衝撃を与えました。アメリカ艦隊の損害は甚大で、多くの兵士が命を落としました。その日のうちに、日本はアメリカとイギリスに対して宣戦布告を行いました。翌日にはアメリカ、イギリス、そしてオランダも日本に宣戦布告しました。こうして、第二次世界大戦がアジアでも現実のものとなりました。

真珠湾攻撃の後、太平洋におけるアメリカ軍の存在感は(一時的に)大きく低下しました。ただし、アメリカ艦隊の一部(航空母艦や潜水艦)は日本の攻撃直前に出航していたため、壊滅したわけではありませんでした。このことにより、アメリカは約半年後には日本艦隊に対抗し、最終的には大部分を撃破することができました(詳細は後述)。しかし、この時点では日本海軍と日本陸軍が絶好の機会を逃さず、東南アジアの広範囲を征服することに成功しました。

スラバヤ沖海戦と日本によるオランダ領東インドの占領

日本の真珠湾攻撃を受け、オランダは1941年12月8日に日本に対して宣戦布告しました。1942年1月11日、日本軍はオランダ領ボルネオをはじめ、オランダ領東インドの各地に上陸しました。王立オランダ領東インド陸軍(蘭印軍)は日本軍の侵攻をおさえることができず、各地が急速に占領されていきました。

海上でも日本軍の進撃を阻止する戦いが繰り返されました。1942

年2月27日、「スラバヤ沖海戦」が勃発しました。カレル・ドールマン少将の指揮のもと、アメリカ、イギリス、オーストラリア、オランダのABDA艦隊は、日本軍の艦隊によるジャワ侵攻を防ごうとしました。しかし、この戦いで日本軍はABDA艦隊を撃破し、約2300人の兵士が命を落としました。そのうち918人はオランダ兵でした。一方、日本側の損害はわずかで、戦死者は10人にとどまりました。

この戦いの後、日本軍は1942年3月初めから各地で大量の兵士を上陸させ、オランダ領東インドを完全に占領し、1942年3月8日に蘭印軍は日本軍に降伏しました。日本は、1942年前半にオランダ領東インドだけでなく、その他の東南アジアのかなりの部分も制圧することに成功しました。これにより、日本の目標であった「東アジアを支配する大日本帝国」を実現しました。しかし、その支配は長くは続きませんでした…。

ミッドウェーの海戦

1942年6月、日本はアメリカが占領していた太平洋のミッドウェー島を攻略することを決定し、攻撃を開始しました。しかし、日本海軍の使用していた秘密の暗号がアメリカの情報機関によって解読されていたことに、日本軍は気づいていませんでした。そのため、アメリカ海軍は日本の極秘通信を全て把握し、日本軍の攻撃に対して十分に備えることができました。

真珠湾攻撃の前に出航していたため難を逃れていた航空母艦により、アメリカ海軍はミッドウェー海戦に勝利することができました。この戦いは東南アジアにおける戦争の転換点となりました。その後1945年に戦争が終結するまでの間、日本は次々に領土を失っていききました(後述)。



出典: MP Art Studio / © Maarten Platje

捕虜

戦争中に敵軍によって捕らえられた軍人。

日本は、占領地からの捕虜や労働者の大勢を利用し、鉱山や造船所、工場、鉄道の建設現場などで強制的に働かせました。これは、捕虜の取扱いなど、戦争の実施について決めた国際的な取り決めに反する行為でした。

日本の若い男性の多くは兵士として動員されていたため、戦争を支えるために必要な重労働を担える男性がほとんど残っていませんでした。そのため、特に占領地の若い男性が強制労働者として働かされました。また、約14万人の連合国軍捕虜も日本が占領した地域や日本国内(約3万6千人)で強制労働に従事させられました。

有名な例として、1942年から1944年にかけて日本が建設した「泰緬鉄道」(タイとビルマ、現在のミャンマーを結ぶ鉄道)があります。この建設では、過酷な環境と重労働によって、およそ1万5千人の捕虜と約10万人の現地人労働者(ロームシャ)が命を落としました。

日本国内では、捕虜たちは全国に分散され、日本各地にあった130か所の収容所に収監されました。

捕虜たちは酷い扱いを受け、危険な状況で過酷な労働を強いられました。多くの人々(オランダ人は871人)が、捕虜として日本で囚われている中で命を落としました。



泰緬鉄道で強制労働させられる捕虜たち 出典:オーストラリア戦争記念館

多くの日本兵は、捕虜に対して尊敬や同情は必要ないと考えていました。彼らは日本の軍事政権によって「天皇のために死ぬことが名誉である」と教え込まれていました。日本兵にとって、捕虜となることはその兵士本人だけでなく、家族にとっても大

きな恥であると言われていました。

捕虜となった人々はこうした侮蔑を感じ、残忍な暴力、医療も受けられず十分な食料もない過酷な環境のもとでの収容生活、そして危険な状況での労働に苦しめられました。



モロクレンバンガン飛行場(スラバヤ近郊)

出典:ウィキペディア・コモンズ/アムステルダム世界博物館

再びヨハン

ヨハンは1941年11月にスラバヤ近郊の航空基地へと異動になりました。

ヨハンはモロクレンバンガン航空基地で勤務することになりました。ここは海軍航空隊の水上機基地でした。1942年になり、日本軍が急速にオランダ領東インドを占領し、この飛行場も攻撃を受けるようになると、ヨハンがそこに留まることはもはや不可能でした。ヨハンは数千のオランダ海軍兵や蘭印軍の兵士たちとともに、船でオランダ領東インドを脱出してオーストラリアへ向かい、そこから戦闘を続けるよう命じられました。しかし、ヨハンや他の兵士たちはその命令を実行することができませんでした。

ヨハンが乗っていた船「チサロア」は、1942年3月2日に港町チラチャップを出港しオーストラリアへ向かいました。最初の数日は順調でしたが、3月4日、船は日本海軍によって拿捕されました。日本軍により、船は乗組員全員を乗せたままオランダ領東インドに戻り、セレベス島(現在のスラウェシ島)のマカッサルというところへ向かうよう命令されました。そこで乗組員は全員捕虜となり、収容されました。

マカッサルでの捕虜生活

捕虜たちはマカッサルの港から捕虜の収容所として使われる刑務所へと歩かされ、その道中では日本

の監視兵によって追い立てられ、殴られました。現地の住民たちも彼らを罵倒し、オランダの支配から解放されたことを喜んでいました。日本のスローガンは「アジア人のためのアジア」でしたから、住民たちは自分たちも自由を得られると考えていました。

しかし実際にはそうではなく、最終的には現地の住民も日本の占領下で苦痛を味わうことになりました。何百万もの、特に若い男性たちが徴用され、日本の占領地域で過酷な環境のもとで労働を強いられました。この強制労働をさせられた現地の住民たちは「ロームシャ」と呼ばれ、その多くが命を落としました。

収容所での生活は捕虜たちにとって非常に過酷なものでした。狭い監房に20人が押し込められ、頻繁に暴力を振るわれ、食事もひどく、時には全く与えられないこともありました。その後古い兵舎へと移送され、それからは状況が多少改善されました。彼らは働かなければなりませんでした。時には兵舎内を自由に歩き回ることも許され、わずかながら自由な時間を持つこともできました。ヨハンはその時間を活用して、少し英語を学びました。自分で小さな辞書を作り、それを常に肌身離さず持ち歩いていました。その辞書を失わ



マカッサルの港の捕虜たち 出典: Van Dijk (1980年代のテレグラフ紙の漫画家)

ずに済んだのは奇跡と言っていいでしょう。

マカッサルでの収容生活は終わりを告げ、ヨハンはイギリス、アメリカ、オーストラリア、オランダ、そしてオランダ領東インドの海軍兵約千人と共に選ばれ、造船所で強制労働をさせられるために長崎に送られました。1942年10月、彼らはマカッサルから長崎へ向けて船で輸送されま

した。想像してみてください——熱帯のマカッサルから、遥かに寒い長崎へ、防寒着もないまま移送されたのです！ 長崎に到着した捕虜の多くはすぐに体調を崩し、病気になりました。

地獄船

捕虜たちの輸送は危険と隣り合わせでした。1942年以降、およそ14万人の欧米人を中心とした連合国

側の捕虜、そして数えきれないほどのアジア人労働者(ロームシャなど)が、いわゆる「地獄船(Hell Ships)」と呼ばれる船に詰め込まれ、東南アジア各地や日本へと輸送されました。

「地獄船」は多くの場合貨物船であり、時には旅客船もあったものの、大勢の捕虜を輸送するのには適していませんでした。

ほとんどの捕虜や強制労働者は船の狭くて換気の悪い船倉に押し込まれて輸送されました。ヨハンが乗せられた地獄船「浅間丸」も同様でした。

トイレは甲板の上にしかありませんでした。甲板に間に合わない人も多く、そのため船倉内の衛生状態はどんどん悪化していきました。さらに、船内の状況を過酷にしたのは暑さ、そしてその後航海中に増していく寒さでした。

時々甲板の上から捕虜たちにわずかな食料や飲み物が支給されましたが、それは船倉の全員で分けなければなりませんでした。そのため、全員に支給されるはずの食料すら受け取れない人もいました。このような劣悪な、衛生状態も悪い環境の中で多くの捕虜が船で病気になり、衰弱した状態で長崎に到着しました。

捕虜のための救命胴衣や救命ボートは用意されていませんでした。そのせいもあり、連合国軍の潜水艦や航空機による攻撃に対する恐怖は

非常に大きいものでした。

連合国軍は、日本およびアジアにおける日本軍への補給を阻止するため可能な限り多くの日本の船を撃沈しようとしていました。しかし、日本の船が捕虜を乗せているのか、日本兵や軍需物資を運んでいるのかを判別するのは容易ではありませんでした。これは、捕虜を乗せた船が、本来義務付けられている赤十字の標章を表示していなかったためです。そのため、連合国軍によって地獄船(捕虜輸送船)が撃沈され、多くの捕虜やロームシャ(強制労働者)が命を落としました。

ヨハンは、他の捕虜たちとともに、日本の「地獄船」での過酷な航海を生き延びました。ヨハンは長崎市近くの湾内にある香焼島というところにあった、福岡俘虜収容所第2分所に収容されました。



長崎に到着した浅間丸 個人所蔵 / 出典不明



香焼島と造船所(赤印)、福岡第2分所(青印) パブリックドメイン/米国国立公文書館



福岡俘虜収容所第2分所 パブリックドメイン/米国国立公文書館

福岡俘虜収容所第2分所

収容所にはいくつかの建物があり、その大半は50～60人の捕虜が食事や睡眠を共にする部屋に分けられていました。

この収容所にはオランダ、オランダ領東インド、イギリス、オーストラリア、アメリカの捕虜1563人が収容されていました。その後、半数以上が日本各地にあった他の収容所に移送され、主に炭鉱での労働を強いられました。収容所の大半は、各国の海軍兵や蘭印軍の兵士によって占められていました。

捕虜の中には、スラバヤ沖海戦で生き残り、日本軍によって海から救助された者もありました。彼らは捕虜となり、福岡第2分所を含む日本国内や東南アジア各地にある捕虜収容所へ移送され、強制労働をさせられました。

収容所にはいくつかの建物があり、50～60人が共に食事をし、二段ベッドで寝る28の部屋に分けられていました。また、別の建物は「炊事場」「倉庫」、そして日本兵の詰め所として使われていました。トイレや風呂場は原始的なもので、捕虜たちが入浴できる大きな浴槽のある風呂場ができたのはしばらくしてからでした。収容所の捕虜の中には医師や看護師がおり、その他に日本人医師も1人いました。しかし、医療器具や薬、食料が不足していたため、十分な治療を行うことはできませんでした。日本兵がその大部分を自分たちのために隠していたからです。捕虜たち

は時折そこから薬や食料を盗み出そうとしたり、造船所から収容所に密かに持ち込もうとしたりしました。見つければ厳しい罰を受けることになり、実際にそれは何度も起こりました。

捕虜たちは香焼島にある川南(かわなみ)工業の香焼造船所での労働を強いられていました。彼らは日曜日を除く毎日、1.5キロメートルの道を歩いて造船所へ向かいました。造船所に着くと、厳しく、ときには残酷な日本人監督の指示を受けながら、船の建造作業を行いました。一日の労働時間は長く、朝早くから夕方遅くまで続けました。さらに、適切な作業服が支給されていなかったこともあり、仕事は非常に危険でもありました。何人かの捕虜が造船所で命を落としました。

ヨハン は収容所内の炊事場での仕事や雑務もすることになりました。炊事場から出される食事は、ほとんどが水っぽいスープに少しのご飯、海藻、わずかな肉、そしてたまに配られるパンでした。そのため捕虜たちはどんどんやせていき、健康状態もどんどん悪くなっていきました。その上、日本兵の目に少しでも怠慢と映ったり、何かを間違えたときとみなされたりすると、ほぼ毎日のように殴られて罰を受けました。

収容所の衛生状態は劣悪でした。捕虜たちはノミなどの虫や有害生物に悩まされ、皮膚の感染症にも苦しみました。それでも、捕虜たちは時々グループごとに入浴する機会を与えられました。お風呂はコンクリートでできた大きな浴槽で、そこに熱いお湯が張られました。最初のグループにとってはお湯が熱すぎ、お湯は交換されないで最後のグループが入る頃にはすっかり冷めてしまい、汚くなっていました。衣服の問題も深刻でした。よい服を手に入れるのは難しく、捕虜たちは薄手の熱帯向けの衣服のまま、寒さと雨の中で働かなければなりませんでした。捕虜たちは栄養不足によって衰弱し、多くが肺炎やその他の病気で命を

落としました。

最終的には72人の捕虜が収容所や造船所の過酷な環境のために亡くなりました。また、福岡第2分所から他の収容所に移送された後、そこで亡くなった人たちもいました。

捕虜たちは士気を保つために、時々ちょっとした娯楽もしていました。例えば自分で作った楽器で音楽を演奏したり、日本兵についての冗談を言ったりしていました。また、日本人労働者たちが話しているのを聞いて得た情報をこっそり紙に記し、それを他の俘虜たちに回すこともありました。

造船所では、捕虜たちは作業中にあちこちでわざと小さな欠陥を作り、船の質を下げるようにしていまし

た。発見されれば厳しい罰が科されるので、捕虜たちは大きなリスクを冒していました。

日本の監視員は全員が捕虜に対し残忍で冷酷だったわけではありません。中には、捕虜に対してこっそりと少し多めの食料を与えてくれたり、薬をくれたりする人もいました。また、体が弱った捕虜には比較的軽い作業を割り当ててくれたり、仕事の後に海で泳ぐことを許されることもありました。

捕虜の中には密かに日記をつけている者もありました。小さな紙切れや、うまく隠された手帳、さらにはタ

バコ の箱にまで、収容所での生活や造船所での作業の様子について書いていました。捕虜たちは日記をつけることが禁じられていると知りながらも、それでも書き続けました。日本兵に見つかった時には厳しい罰を受けました。見つかった日記は破棄されましたが、幸いいくつかは見つからずに残りました。これらの日記は貴重な証言であり、収容所や造船所での生活に関する重要な情報を伝えてくれます。



収容所内部。テーブルとベンチが置かれ、壁際には寝床が並んでいる。
パブリックドメイン / 出典不明

Tis 13 Aug 1943.
Ik heb Influenza en ben zoudende niet naar
de werf. Ik ben van plan om te stoppen met het
debauch 'twart te gevaarlijk. Ik rest moet ik
maar onthouden. En zijn meer heel veel
ongerechtigheden gebeurd. Laat ik er
maar over zwijgen. Laten we hopen
dat dit leven niet te lang meer
duurt. De nieuwshetellen die nog
steeds door komen zijn uitstekend
dus alle hoop op gas stellen is
rustig de afloop afwaakt.
Hij zal het wel maken
T3/8-43

捕虜の日記の一部
個人所蔵 / 出典不明

1943年8月13日

インフルエンザにかかったから造船所には行かなかった。日記をやめようと思う。危険すぎる。残りは覚えておくしかない。また多くの不正が行われているが、何も言わないでおこう。この生活があまり長く続かないことを願うばかりだ。今も届くニュースは素晴らしいもののばかりなので、全ての希望を神に託し、静かに結末を待とう。きっと彼がなんとかしてくれる。

ヨハン・ウィレム・スクラムの捕虜カード

第二次世界大戦中、日本軍は国際条約に基づき、捕虜の記録カード（銘々票）を作成しました。銘々票には捕虜の個人情報として、名前、番号、生年月日、階級、健康状態、収容所の名称、亡くなった捕虜についてはその死亡日が記載されています。

以下のウェブサイトで多くの銘々票を名前で検索することができます。

www.nationaalarchief.nl/onderzoeken/index/nt00425

姓・姓 Group	姓・姓 Name		生年月日 Date of Birth
	Schram, J.W.		30-7-1918
姓・姓 Nationality	階級 Rank	所属部隊 Unit	収容所 No. 13453
	Netherlands	Marine Vliegkamp Mors-Kranslagan Soerabaja	
捕虜 Date of Capture	父の名 Father's Name	母の名 Mother's Name	収容所 Kinderzieken Zondag
1942年11月	Gehrm, A.		
出生地 Place of Origin	職業 Occupation		
Welfst, Nederland	軍人		
送附先 Destination of Report	備考 Remarks		
1. Schram, J.W. (Schram) 460, Rotterdam, Holland			

備考欄 Other Information
昭和17年10月24日 捕虜伝達所第II-収容
昭和18年7月 長崎県 昭和19年7月 長崎県

香焼島の人々の暮らし

香焼島は貧しい島でした。島民は畑で働くか、島にあった造船所で働いていました。

1941年に第二次世界大戦がアジアで始まると、ほとんどの日本人男性が徴兵され、軍の仕事をするようになりました。そのため、すでにそこで働いていた朝鮮人労働者に加え、女性や子供たちも造船所で働かなければなりません。1942年からはそこに捕虜が加わりました。

戦時中の香焼島の人々の生活は一体どのようなものだったのでしょうか。戦争を経験した香焼の人たちへのインタビューを通して、私たちは当時の状況について少し知ることができました。また、中学生たちも家族にインタビューをしてくれました。

それによると、戦争中、香焼島の人々の暮らしはどんどん厳しくなっていました。お米はほとんど手に入らず、人々はサツマイモや、小麦の粒がわずかに入った薄い粥、さらには本来なら家畜のえさとして使われるような食べ物でしのがなければなりません。きれいな水もほとんど手に入らず、島民は雨水に頼っていました。自分で作物を育てることができた人は、比較的恵まれていたと言えます。

そして、1944年になるとアメリカ軍の飛行機による空爆や銃撃が増え、そのたびに繰り返される防空壕への避難、そして医療の不足など、戦争は香焼島の人々の暮らしを過酷

なものにしていきました。

子供たちも12歳ぐらいになったら造船所で働かなければならず、学校で勉強できるのは週末だけでした。彼らは自分の家から造船所の入り口まで歩き、そこから捕虜と一緒に列を作って最後の道を行進しました。子供たちは大柄な欧米人の捕虜たちがとても珍しく、手を振りましたが、それは禁止されており、捕虜も子供たちとコンタクトをとることは禁止されていました。

すでに述べたように、造船所や収容所の塀の中での捕虜たちの暮らしは過酷で非情なものでした。しかし、収容所の塀の外で暮らしていた日本の普通の人々の生活もまた非常に厳しく、彼らもまた生き延びるために必死だったのです。捕虜とは別に暮らしていましたが、彼らも捕虜と同じように戦争の犠牲者だったのです。そして、次の章で詳しく述べますが、犠牲者は香焼の島民だけではなく、多くの日本の都市が空襲を受け、日本には木造家屋が多かったので大規模な火災が発生し、多数の日本人が命を落としたのです。

長崎への原爆投下

日本は、制圧した広大な東南アジアの領土を維持することがもはやできなくなっていました。しかし、軍司令部の一部には、戦争を終わらせようという考えがありませんでした。

1942年半ばから1943年初めにかけて、連合国軍は反撃を開始しました。連合国軍は着実に日本に迫り、戦争が進むにつれて、日本本土が攻撃の標的となりました。また、連合国軍の海上封鎖により物資が日本に届かなくなり、資源や食糧の不足が深刻になりました。

1945年3月9日から10日にかけて、東京に対する最初の大規模な爆撃(東京大空襲)が行われました。主に焼夷弾によるこの空襲では、9万人以上の民間人が犠牲となり、その多くが女性、高齢者、子供でした。4分の1の建物(主に木造家屋)が焼失し、多くの人々が家を失いました。爆撃を受けたのは東京だ

けではなく、ほかにも日本国内の64の街が爆撃を受け、多くの人が亡くなり、家を失いました。

それでも日本政府は降伏して戦争を終わらせようとはしませんでした。そこで、アメリカ政府はかつてないような重大な選択をします。大量破壊兵器を使って日本を爆撃することを決定したのです。1945年8月6日、広島に原子爆弾が投下され、続いて8月9日には二つ目の原子爆弾が長崎に投下されました。

長崎に投下された爆弾(「ファットマン」)は、実は長崎の北に位置する小倉(現在の福岡県北九州市)の軍需工場を標的としていました。しかし、小倉は当日もやに覆われて正確に狙うことができなかったため、基地に引き返し、その途中で第二標的であった長崎に投下する決定が下されました。

原爆投下は全ての人にとって大きなショックでした。爆発のすさまじい威力、強い閃光、猛烈な熱風、そしてその後に訪れた不気味なまでの静けさは、人々にとって生々しい記憶となりました。そしてその後、多くの命が失われ、数え切れないほどの負傷者が出たこと、街が壊滅し、多くの大切な人々を失ったことへの悲しみが、人々に重くのしかかりました。



爆弾投下後の長崎。後ろに破壊された浦上天主堂が見える。
出典:ウィキメディア・コモンズ / 米国国立公文書館

人々が受けた苦しみと計り知れない悲しみは、想像を絶するものです。その日の長崎での犠牲者数はおよそ4万人にのぼり、その数は日を追うごとに、何か月たっても増え続けました。

今日に至るまで、長崎(そしてもちろん広島)の人々の心の中には、あの日の記憶が深く刻まれており、定期的に集会や追悼式が行われています。そこでは原子爆弾の投下とその影響について考えられています。これらの行事には子供たちも積極的に参加しており、多くの生徒が学校活動の一環として、または自主的に平和運動に取り組んでいます。彼らの目的は、私たち一人ひとりに平和の大切さを訴え、核兵器のない世界で平和に生きるために行動を起

こすことです。

ヨハンや他の捕虜たちも、この爆発を目の当たりにしました。彼らは眩しい閃光を目にし、凄まじい爆音を聞き、爆発後に押し寄せた熱い突風を感じました。そして、しばらくすると巨大な煙の柱がまるでキノコのように街の上空に何キロも上がっていました。

原爆は香焼や造船所、そして収容所にも被害をもたらしました(倒壊した壁、割れた窓など)が、爆心地からはそれほど近くなかったため、長崎市内の被害ほど深刻ではありませんでした。香焼の捕虜たちは全員生き延びましたが、特に造船所では建物の倒壊により負傷した者もいました。



出典:ウィキメディア・コモンズ / 米国国立公文書館

収容所の日本兵たちは数日後に姿を消しました。捕虜たちは最初は収容所に留まっていたましたが、その後、小グループに分かれて船で街に向かいました。彼らはそこで、自分たちの目で破壊された街を目撃しました。街にはほとんど何も残っておらず、そこにあったのは燃え続ける瓦礫の山だけでした。そして彼らもまた、何万人もの人が命を落としたことを知ったのです。

その後、日本政府は1945年8月15日に戦争終結の決定を国民に発

表しました。この背景には、広島・長崎への原爆投下に加え、同年8月9日にソ連が日本に宣戦布告したことも影響していました。

日本は9月2日に無条件降伏を受け入れる降伏文書に調印し、ついに第二次世界大戦は終結しました。収容所での過酷な3年間、そして原爆の直接的な影響を生き延びた捕虜たちにとって、新しい時代が始まりました。ヨハンにとっても！



香焼島から見た、長崎上空で爆発した原爆
出典：松田弘道 / 長崎原爆資料館

香焼島への食糧投下

ヨハンをはじめとする捕虜たちは、日本の降伏後、空中投下という形で空から食料や薬を受け取りました。

香焼島の日本人たちもこの恩恵を受けました。投下された救援物資が収容所の外に落ちたり、捕虜たちが地元の住民と食料を分け合ったりしたからです。

収容所の上空からは救援物資だけではなく、日本が降伏したこと、そして間もなくアメリカ軍が捕虜たちを救出に来ることを知らせるビラも撒かれました。

空中投下はアメリカ空軍の大型

爆撃機(B29)によって行われました。そのうちの1機が投下中、香焼島から遠くない三和村の近くに墜落しました。

事故が起きたとき、近くに住む日本人たちはただ一人生き延びた搭乗員を懸命に救助しました。その後、この搭乗員は怪我こそ負いましたが、生きてアメリカに帰国しました。

Feb. 1942

American Red Cross

STANDARD PACKAGE NO. 8

for

PRISONER OF WAR

FOOD

CONTENTS

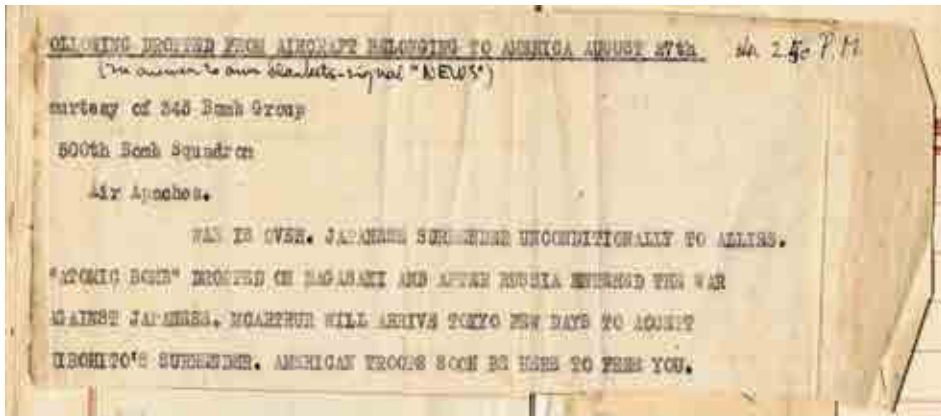
x Evaporated Milk, irradiated	1 14 1/4 oz. can
x Lunch Biscuit (hard-tack)	1 8 oz. package
x Cheese	1 8 oz. package
x Instant Cocoa	1 8 oz. tin
x Sardines	1 15 oz. tin
x Oleomargarine (Vitamin A)	1 1 lb. tin
x Corned Beef	1 12 oz. tin
x Sweet Chocolate	2 5 1/2 oz. bars
x Sugar, Granulated	1 2 oz. package
x Powdered orange concentrate (Vitamin C)	2 3 1/2 oz. packages
x Soup (dehydrated)	2 2 1/2 oz. packages
x Prunes	1 16 oz. package
x Instant Coffee	1 4 oz. tin
x Cigarettes	2 20's
x Smoking Tobacco	1 2 1/4 oz. package



福岡第2分所上空の食料投下

出典：不明 / 原題：Camp Nagasaki Mission No. 315 POW M4 3243N.12950E

収容所からの解放 ヨハンの帰郷



戦争は終わった。日本は連合国に無条件降伏した。「原子爆弾」が長崎に投下され、その後、ロシアが対日戦争に参戦した。マッカーサーは数日以内に東京に到着し、ヒロヒトの降伏を受け入れる。アメリカ軍は間もなくここに到着し、あなたたちを解放する。

捕虜たちへの知らせ：戦争は終わった！ 出典：J. J. Budding



1945年9月13日 収容所を出発する捕虜たち
出典：米国国立公文書館（福林徹氏提供）



米軍病院船ヘイブン号および 米軍護衛空母シェナゴ号、長崎湾にて
出典：米国国立公文書館

9月13日、元捕虜たちはアメリカ軍によってボートに乗せられ、長崎の、かつてオランダ東インド会社の商館が建っていた出島のすぐ近くにある港で降ろされました。

全員が医療検査を受け、シラムが駆除され、そして全身をきれいに洗うことができました。病人は港に停泊していた病院船で適切な治療を受けることができました。ヨハンや元捕虜たちには十分な食事と清潔な衣服が与えられ、その後アメリカの航空母艦シェナゴ号に乗船しました。この船は元捕虜たちを日本の最南端の島の一つである沖縄へと運びました。その後まもなく、彼らは飛行機でフィリピンのマニラへ移動し、そこで療養し、体力を回復させました。ヨハンや多くの元捕虜が故郷への長い旅を始めることができたのは、10月半ばになってからのことでした。

ヨハンの旅は、マニラから米海軍の輸送船ジェネラル A. W. ブリュースター号に乗っての長い船旅から始まりました。目的地は、アメリカ・サンフランシスコ近郊の都市オークランドでした。1945年10月22日に到着すると、元捕虜たちは大きな病院に収容され、再び医療検査を受けました。当然ながら彼らは一刻も早く家に帰りたいと願っていたのですが、帰国のための輸送手段が用意

されるまで待たなければなりませんでした。当時オランダは戦争で疲弊してしまっており、海外にいる自国民を迎えに行くための手だてがなかったのです。

待っている間の時間を有効に使うため、多くの元捕虜たちはオランダに帰国した時に備えてお金を稼いでおこうと仕事を探しました。ヨハンもオークランド近郊のクロケットという町にある砂糖工場で仕事を見つけました。

1945年12月13日になってようやく故郷への旅が続けられるようになり、ヨハンたちは列車でニューヨークへ向かいました。彼らはニューヨークで大型客船クイーン・メリー号に乗り、海を渡ってイギリスのサザンプトンへ向かう旅を続けました。サザンプトンに到着した後、ヨハンは列車でドーバーへ移動し、12月の終わりに、長い帰路の最後の船旅を終えました。そして、1945年12月30日、ヨハンはついにロッテルダムに到着しました。そこでようやく家族や婚約者のアドリアナと再会することができたのです。

家族はすでに1945年10月の時点で、ヨハンが戦争を生き延びたという知らせを電報で受け取っていました。電報というのは電子メールの前身となる通信手段で、文字によるメッセージを早く送るために過去に



先ほど電報を受信した。ヨハンはまだ生きている。母
ヨハンの両親がアドリアナに送った電報 出典：個人所蔵

使用されていました。家族の喜びは大きく、そして1945年12月30日にヨハンが無事帰国した時、ヨハンの身を案ずる緊張と不安の日々がようやく終わったのです！

ヨハンにとっても、約7年間会うことができなかった家族や婚約者アドリアナに再び会えたことは、とても感動的なものでした。帰国後、ヨハンは数週間の休暇を与えられ、その後再び海軍に復帰することになりました。

そして1946年1月末、アドリアナとヨハンはデン・ヘルダーで結婚しました。結婚後、彼らは短い期間でしたがロッテルダムのヨハンの両親の家、そしてデン・ヘルダーのアドリアナの両親の家に身を寄せました。息子が生まれてからはデン・ヘルダーに住むようになり、彼らはその町で人生の大半を過ごしました。



ロッテルダムのシント・ヨブスハーフェンに元捕虜たちが到着した様子
出典：週刊誌「デ・スピーゲル」、1946年

ヨハンの婚約者、アドリアナにとっての戦争 1940年、ヨハンがオランダ領東インドにいたとき、オランダではドイツとの戦争が始まりました。



アドリアナ 1945年
出典：個人所蔵

オランダは、ドイツ軍との短い戦闘の後、ロッテルダムでの激しい爆撃を経て、1940年5月15日に降伏しました。当時、海軍の町であるデン・ヘルダーもドイツ軍によって爆撃されました。

ドイツ軍による占領後、連合国軍（主にアメリカとイギリス）は造船所がドイツ海軍に利用されるのを可能な限り阻止しようとしました。そのため、連合国軍は造船所を爆撃することにしました。しかし、それはこれ以前のドイツ軍による爆撃と同様、必ずしも正確に行われたわけではありませんでした。住宅地も爆撃を受け、デン・ヘルダーの住民の多くも命を落としました。デン・ヘルダーは戦争中、オランダで最も頻繁に爆撃を受けた都市でした。

アドリアナは当時デン・ヘルダーの実家で両親とともに暮らしていましたが、爆撃を避けるため、両親や兄弟姉妹とともにデン・ヘルダーからそれほど遠くない小さな村、アンナ・パウロウナへ避難しました。アドリアナたちは終戦後の1945年によりデン・ヘルダーに戻り、その年の終わりに、前の章でお読みいただいたように、アドリアナとヨハンは再会を果たしたのです！



デン・ヘルダーへの爆撃
出典：デン・ヘルダー・ヘリテージ財団

日本人にとっての戦争

日本人にとっても、戦争はとても過酷なものでした。多くの人たちが病気や食糧・医療品不足、そして度重なる爆撃によって亡くなりました。

原子爆弾も多くの命を奪いました。広島と長崎では、この二つの爆弾により、合計およそ15万人が亡くなりました。その後何か月、何年もの間に、原爆によって重傷を負ったり、また原爆による放射線を受けた影響で、さらに数十万人が命を落としました。また、親が浴びた放射線の影響で、先天的な異常を持って生ま



出典:ウィキメディア・コモンズ/山端 庸介

れた子供もいました。

家族や大切な人を失い、二度と再会することができなかった人々の、深い悲しみに満ちた物語には言葉が失います。長崎の原爆が投下された場所やその近くにある原爆資料館を訪れると、戦争の悲劇がいかに大きなものであったかを痛感させられます。たとえば資料館には、ある女子学生の金属製の弁当箱と、その子が写っている集合写真が展示されています。この女子学生は原爆で亡くなり、遺体は見つかりませんでした。残されたのは、原爆の熱で一部が溶け、形がゆがんだ弁当箱だけでした。また、展示には、飲み物や食べ物、救護を求めてさまよう人々の姿を捉えた写真も展示されています(写真参照)。

資料館でこのような資料や、被爆者の生々しい証言を目にすると、戦争が多くの子供のいない日本人にも計り知れないほどの苦しみをもたらしたのだということを思い知らされます。この戦争は、日本国民の戦争ではなく、一部の軍人によって引き起こされたものであり、議会は一部の政治家によって権力を奪われていたため、この戦争は議会の支持も受けていなかったのです。

1945年8月15日、天皇はラジオを通して戦いの終結を表明しました。しかし、軍の一部はこれを受け入れず、最後まで戦い続けようとしていました。幸い、軍の思い通りにはなりませんでした。

1945年9月2日、当時の外務大臣であった重光葵が、アメリカの戦艦ミズーリ号の上で無条件降伏の文書に署名しました。戦後になって初

めて、原子爆弾の投下と日本の降伏がヨハンとその収容所の捕虜たち(そして全ての収容所の捕虜たち)の命を救った可能性が高いことが明らかになりました。日本軍の上層部は、もしアメリカ軍が日本本土に上陸した場合、全ての捕虜を処刑することを検討していたのです。日本が降伏していなかったら、それが現実になっていたかもしれません。



パブリックドメイン / 出典: Stephen E. Korpanty

オランダ領東インドの戦中と戦後

日本がオランダ領東インドを占領していた間、男性、女性に関わらず、オランダ領東インドにいたほぼ全てのオランダ人やその他のヨーロッパ人は日本兵が監視する抑留所に収容されました。

抑留所は、成人男性抑留所、婦女子抑留所と少年抑留所に分けられていました。抑留所は多くの場合、街の一面や建物を有刺鉄線で囲ったもので、初めのうちは決まった時間内であれば出入りすることが出来ました。1943年になると規則が厳しくなり、抑留者が外部と連絡を取るのを防ぐため、竹で編んだ塀が有刺鉄線に重ねて取り付けられました。加えて、抑留所は厳重に監視されるようになりました。

抑留所内の状況はどんどん悪化

していきました。食料、水、薬が極端に不足していました。また、日本人の見張りは残酷で、それは女性や子供に対しても同様でした。衛生環境も非常に悪かったため赤痢などの感染症が広がり、何千人もの命が奪われました。

当初、少年たちは17歳になる頃までは母親と一緒にいることが出来ました。しかし、1944年から男の子は10歳になると母親から引き離され、男性抑留所や少年抑留所に送られ



チデン婦女子抑留所 パブリックドメイン / 出典：オランダ国立公文書館

るようになりました。運よく父親や兄と一緒になれた少年もいましたが、全く頼る人がいないまま過ごさなければならぬ少年もいました。彼らもまた、大人の男性と同様に日本人のために働かなければなりません。農作業、木の伐採、掃除、さらには病人の看護などの仕事です。

戦争が終わったとき、少年たちは抑留所から解放され、赤十字の支援を受けながら母親を探しました。多くの場合、母親を見つけ、再会することができましたが、抑留所での過酷な生活により命を落とした母親もあり、再会できなかった子供たちもいました。

ところで、多くの蘭印系オランダ人は抑留所に入れられることはありませんでした。この「抑留所外に住んでいた人々」は主に女性と子供たちで、多くの場合、普通の家に集まって暮らしていました。収入のない彼らにとってはその方が経済的に負担が少なく、また安全でもあったからです。とはいえ、彼らもまた日本軍の支配と恐怖にさらされていることに変わりはありませんでした。そして、戦争が進むにつれて、インドネシア人も次第に攻撃的になっていきました。

慰安婦

日本が占領したアジアの国々では、多くの少女や若い女性が楽しい仕事やより良い生活ができるなどの偽りの約束によって家から誘い出されました。彼女たちは、実際には

日本軍によって強制的に日本兵のための売春婦として働かされたのです。正確な人数は不明ですが、その数は数十万人にのぼると推定されており、その中には何万人ものオランダ人女性やオランダ領東インド出身の女性・少女が含まれていました。日本は彼女たちを「慰安婦」と呼んでいましたが、これは非常に誤解を招く呼び方です。なぜなら、捕らえられた少女や女性たちは自由を奪われ、実際には虐待されていたのですから！

ベルシアップ

戦争が終わったとき、多くの人々は自由と平穏が戻ると考えていました。しかし、実際にはそうはなりません。1945年8月17日、インドネシアの民族主義者であるスカルノとハッタがバタビアでインドネシアの独立を宣言しました。この二人は戦前からインドネシアの独立を求めている民族主義グループの中でも最も重要な指導者でした。しかし、オランダはこの独立宣言を認めず、彼らの主張に耳を貸そうとしませんでした。

スカルノとハッタの呼びかけにに耳を傾けたのは、インドネシアの若者たちでした。彼らは、オランダの植民地支配が再び復活することを阻止しようしました。そのため、独立宣言の後、インドネシア国内では次第に混乱が広がっていきました。インドネシアの人々の怒りはオランダ人だけでなく、蘭印系オランダ人やオ

ランダと協力していたと見なされた民族グループにも向けられました。特にモルッカ人や、中国系などの他民族が標的にされました。モルッカ人とは、インドネシア東部にあるモルッカ諸島の住民のことです。モルッカ人男性の多くは蘭印軍で働いていたため、オランダの協力者と見なされたのです。

暴力的な時期が続きました。これは主に熱狂的なインドネシアの「ペムダ(若者、の意)」によって引き起こされました。この時期は「ベルシアップ(Bersiap)時代」として知られています。ベルシアップとは、「備えよ」という意味のインドネシア語です。何万もの人々がこの時期に命を落としました。その中には、多くのモルッカ人、オランダ人、蘭印系オランダ人、そして日本兵も含まれていまし

た。日本軍は降伏直後に、これらの人々をペムダの暴力から守るよう命じられていました。この時期の出来事は、独立間もないインドネシアの対オランダ闘争へとつながっていききました。

独立戦争

オランダは経済的な理由から植民地を手放すことを望まず、軍事介入に踏み切りました。1947年の第一次警察行動と、1948年末の第二次警察行動です。インドネシア側はこの戦いを「Agresi Militer Belanda I & II(第一次/第二次オランダ軍事侵略)」と呼んでいます。この軍事介入によりインドネシアの戦闘員とオランダ軍の間で血みどろの残忍な戦いが繰り広げられました。この戦いでは双方が戦争犯罪を犯しており、

数十万人が命を落としました。その犠牲の中にはインドネシアの戦闘員やオランダ軍兵士だけではなく、多くの民間人も含まれています。

特にアメリカからの圧力を受け、休戦が決められました。1949年12月27日、ハーグにおいて主権移譲の調印が行われました。この調印により、スカルノを初代大統領とするインドネシア共和国の独立が正式に承認されました。インドネシアは「賠償金」としてオランダに多額の資金を支払わなければなりません。この支払いは、その後の数年間で完了しました。

旧オランダ領東インドの一部であるオランダ領ニューギニアは、主権移譲後もオランダの支配下に留まりました。しかし、インドネシアはこの地域をインドネシアの領土と見なしていました。アメリカの圧力や軍事衝突の危機が高まる中、多くの交渉を経て1962年にオランダ領ニューギニアはインドネシアに移譲されました。現在この地域はインドネシアの州となり、パプアと呼ばれています。

最近では、オランダ国内でも「インドネシア独立戦争におけるオランダの軍事介入は誤った対応であった」という認識が広まっています。2024年には、オランダ国王ウィレム＝アレクサンダー陛下が、当時のオランダ政府を代表し、オランダが「警察行動」と称して実施した不正行為や残虐な戦争行為について謝罪しました。

インドネシアを去る蘭印系オランダ人

多くの蘭印系オランダ人にとって、新たに成立したインドネシア共和国では自分たちが歓迎されていないことが次第に明らかになっていきました。そのように感じるだけでなく、実際ににそう言われることもあり。その結果、1945年から1965年にかけて、約30万人の蘭印系オランダ人がインドネシアを離れました。彼らの多くは船でオランダへ向かいましたが、アメリカやオーストラリアへ移住した人々も多くいました。

それは、彼らのほとんどにとっては冷たいオランダとの初めての出会いでした。オランダについて話には聞いていたものの、実際に訪れたことがある人はほとんどいませんでした。さらに、第二次世界大戦で略奪され、困窮していたオランダでは、彼らは必ずしも歓迎されたわけではありませんでした。これは、主権移譲後にオランダに渡って来たモルッカ人の蘭印軍兵12,900人とその家族にとっても同様でした。彼らの多くはオランダ到着後、戦争中にオランダを支配していたドイツがユダヤ人の収容所として建設した建物に長期間住まなければなりません。でした。

その後、冷たい歓迎を受けた蘭印系オランダ人やモルッカ人も、次第にオランダ社会に溶け込んでいきました。現在、オランダの人口の10～15%が蘭印またはモルッカのルーツを持っています。戦後オランダへ渡ってきた人々がもたらした文化的



オランダに反対するバナー 出典:オランダ軍事史研究所画像アーカイブ

遺産が、今日のオランダの日常生活の一部として認識されていることは、素晴らしく、そして重要なことです。インドネシア料理やモルッカ料理、オランダの多くの町に見られる「ジャワ通り」や「スマトラ通り」といった地名、市場、さらには異文化交流フェスティバルなどが、その証となっています。

私たちは、この本にも書かれているような歴史をどんなときにも決して

忘れてはなりません。過去があるからこそ、私たちは今の姿があり、そしてそれは未来についても言えることです。



オランダに到着する蘭印系オランダ人 出典：オランダ国立海洋博物館 / Willem Job

戦後のヨハン

ヨハンは海軍に留まり、戦後も多くの艦艇に乗船し、世界中のあらゆる地域を訪れました。

幸い、ヨハンが再び戦争を経験することはありませんでした。とはいえ家にいないことが多く、あちこちの海を航海しました。年を重ねるにつれ、それほど頻繁に航海する必要はなくなり、自宅で過ごす時間が増えました。1964年、ヨハンは士官に昇進し、これは彼にとって海軍でのキャリアの集大成となりました。

彼は1969年に退官し、その後はキャンプに行ったり、手仕事などの趣味を満喫しました。そして、彼の愛する町、海軍の町、デン・ヘルダーに生涯ずっと住み続けました。

多くの元捕虜と同様に、ヨハンも日本から帰国した後、捕虜として過ごした時期についてはほとんど何も話しませんでした。捕虜たちは、話さないことによってあの時期の記憶を忘れられる、と願っていたのです。幸いなことに、自らの経験を語ることができた、あるいは語ろうとした元捕虜もあり、また保存されていた捕虜の日記もあります(25ページ参照)。そのおかげで、私たちは彼らに何があったのかを知ることができます。

しかし、彼らの話はそこで終わるわけではありません。年を重ねるに

つれ、多くの人々がその過酷な時代の記憶を思い出し、当時の出来事に再び苦しむようになりました。また、元捕虜の子供たちも、父親たち

に起きた事に苦しむことが少なくありませんでした。子供たちは何らかの問題があることを感じ取ってはいたものの、それが父親が巻き込まれた戦争と関係があると理解できるようになったのは、ずっと後のことでした。

ヨハンは75歳で亡くなりました。亡くなる直前に、彼は戦後ずっと心の中で葛藤していた自分の気持ちを少しだけ語りました。



ヨハン 1964年 個人所蔵



個人所蔵



彼は捕虜として利用され、奴隷のように扱われたと感じていました。その思いを拭い去ることはできませんでした。

日本の高官たちは、第二次世界大戦で多くの人々に苦しみを与えたことについて、何度か謝罪を表明しました。しかし、被害者の多くはその謝罪の誠意を疑っており、ヨハンも同じ思いを抱いていました。彼は、日本とオランダの両国が、自分や他の(元)捕虜に対して無礼な対応をしたと考えていました。そのため、彼は二度と日本と関わりたくないと思っていました。

ヨハンの息子は、父の戦争の歴史をどのように受け止めたのか？

強制労働や虐待が繰り返されたこの過酷な経験は、ヨハン個人にど

のような影響を与えたのでしょうか。また、それは戦後のヨハンとアドリアナの生活にどの程度影響を及ぼしたのでしょうか。息子のアンドレにとって、それは両親が亡くなって初めて(アドリアナはヨハンよりも少し前に亡くなりました)少しずつ明らかになり、そしてアンドレは両親がどんなことを経験してきたのか調べ始めました。

これは彼のその後の人生に大きな影響を与え、また深い悲しみをもたらすものでもありました。自分が父の過去について長い間何も知らずに過ごしてきたことに気づいたからです。アンドレはその時になって初めて、父の心の中では戦争がずっと続いていたことを痛感しました。父が人生の終わりに語った言葉がそれを証明していました。

この感情を揺さぶられる経験は、新たな考え方につながりました(後述)が、アンドレにとっては「谷底」に突き落とされたように感じる時期でもありました。語られることのなかった戦争の過去に向き合うことは、精神的にも感情的にも辛いことでしたし、それは今でも同じです。

この経験や、この本に書かれている歴史の一片は、多くの人々に共通する物語でもあります。そして、それは私たちそれぞれの記憶の中に残るべきものです。歴史とは、いろいろな意味で、現在や未来のために学ぶものなのですから！

トラウマの世代間伝達: 家族や家庭の中で生き続ける戦争の過去

人生において何か衝撃的な出来事を経験すると、それがその後の人生に影響を及ぼすことがあります。もし、そのような衝撃的な出来事やトラウマを克服することができなければ、身体的・精神的な問題を引き起こす可能性があります。また、日常生活にも影響を及ぼすことがあります。

テレビのニュースで流れる映像、バイクの爆音、戦争を描いた映画などが記憶を呼び覚ますことがあります。その結果、その人はうつ病、怒りの爆発、悪夢などの症状に苦しむこともあります。

子供たちもその影響を受け、親のトラウマを感じ取り、共に経験し、時には自分の成長や日常生活に無意識のうちに取り込んでしまうこともあります。また、最近では、さらにその次の世代にもその影響が現れる可能性があります。そこには遺伝的要因が関与している可能性も指摘されています。

幸い、第二次世界大戦以降、トラウマの問題、特に「トラウマの世代間伝達」に対する関心が高まっています。社会的支援と精神ケアの両面で被害者へのサポートが行われており、トラウマの治療やその継承に関する科学的研究も盛んに進められています。

しかし、第二次世界大戦や、その後の独立戦争を経験した兵士、また初期の国連平和維持活動に参加した兵士たちは、当時こうした支援や関心をほとんど受けることができず、受けたとしても随分後になってからでした。彼らのほとんどが、その経験を誰にも気づかれずに一人で乗り越えるしかありませんでした。その姿勢は尊敬に値するものですが、現代を生きる世代の多くの人々も、それを感じとっています。

追悼し、思いを寄せる

2015年9月13日、かつて福岡俘虜収容所第2分所があったところに建立された追悼祈念碑の除幕式が行われました。

長崎湾の香焼に設置されたこの祈念碑は、全ての捕虜を追悼するものです。祈念碑には収容所内で亡くなった方々の名前が刻まれています。また、捕虜たちが受けた苦しみに対する謝罪の言葉も刻まれています。この祈念碑は、福岡第2分所の元捕虜に対する敬意の表れとして、長崎市民の方々によって建立されました。このことは遺族にとっても大きな意味を持つものとなっています。除幕式には、収容所の生存者や福岡第2分所にいた捕虜の家族が出席しました。あのヨハンの息子も参列しました。

これまでに多くの人が祈念碑を訪れ、そこに慰めを見出してきました。毎年9月13日前後に、日本の人達によってこの祈念碑の前で追悼

式が行われています。この祈念碑は、犠牲者への敬意と、そこで起きたことを認める象徴であり、犠牲者やその遺族が心の安らぎを得て、過去と和解する手助けとなっています。

また、福岡第2分所の祈念碑の近くには、墜落したB29爆撃機の乗組員を追悼する祈念碑も建てられています。この飛行機は、1945年に空中投下任務のために飛行中、香焼の近くで墜落しました(31ページ参照)。

かつて収容所があった場所には、現在、大きな校庭を持つ学校が建っています。祈念碑はその学校の裏にあります。最初は長崎の市民ボランティアが祈念碑の清掃などをしていましたが、今はこの学校の生徒たち



福岡俘虜収容所第2分所の祈念碑とB29爆撃機犠牲者の祈念碑 個人所蔵

がその役割を担っています。捕虜の遺族にとって、とても価値のある、美しく感動的な行動です。

長崎にはもう一つ、原子爆弾が投下された場所の近くに、福岡俘虜収容所第14分所の捕虜を追悼する祈念碑があります。14分所は長崎市内にあり、原子爆弾が爆発した地点から約1キロの場所にありました。

福岡の水巻町にも捕虜のための記念碑「十字架の塔」があります。この記念碑は、第二次世界大戦中に日本国内の捕虜収容所で命を落と

した871人のオランダ人捕虜を追悼しています。記念碑には全ての犠牲者の名前が刻まれています。

ここで、インドネシアにある「オランダ人英霊墓地」についても言及するべきでしょう。ここには何千人ものオランダ人犠牲者が埋葬されており、その中には軍人だけではなく民間人の犠牲者もいます。これらの英霊墓地は、オランダ戦争墓地財団とコモンウェルス戦争墓地委員会の責任のもとで管理されています。



収容所跡地：現在は学校と校庭になっている
個人所蔵 / 出典：笹本妙子



水巻町の十字架の塔 個人所蔵

オランダ、インドネシア、日本における追悼

オランダの追悼式典は毎年8月15日に、ハーグ市のインディッシュ・モニュメント(オランダ領東インドにおける戦没者の慰霊碑)で行われます。この追悼式典では、第二次世界大戦の終結に思いを馳せるとともに、日本との戦争や日本によるオランダ領東インドの占領によって犠牲となった全ての人々を追悼します。多くの人々にとって、この式典は同じような経験を持つ人々とともにアジ

アでの第二次世界大戦や自身の家族の歴史について考える機会となっています。また近年では、両親や祖父母に招かれて訪れる若い世代の式典への参加も増えています。自らのルーツへの関心や祖先への敬意から参加する人もいます。

またここ以外にも、オランダ各地で8月15日前後にその地域の追悼式典が行われています。たとえば、ルールモントにある「アジアでの戦争記念公園」やアーネムにある「ブロンベーク」でも追悼が行われます。

「ブロンベーク」は退役軍人のための施設であり、オランダの植民地軍事史に関する博物館でもあります。ブロンベークの広い庭には複数の記念碑があり、毎年多くの関係者が集まります。そこでは、婦女子抑留所や少年抑留所、「地獄船」などの追悼式が営まれます。全て、アジアにおける第二次世界大戦の歴史と犠牲者を忘れないためです。

日本とインドネシアの人々もまた、第二次世界大戦による多くの犠牲者を追悼しています。これは日本で

はオランダと同じ日、毎年8月15日に行われます。日本での式典は、特に「すべての人々の平和への願い」のために祈られます。

インドネシアでは8月17日に「独立記念日」を祝います。1945年のこの日、後の大統領スカルノによって独立宣言が読み上げられたことに由来します。11月10日には「英雄の日」が祝われ、独立戦争で犠牲になった全てのインドネシア人を追悼します。



ハーグにあるインディッシュ・モニュメント 個人所蔵

過去を忘れず、それを 未来への道しるべに

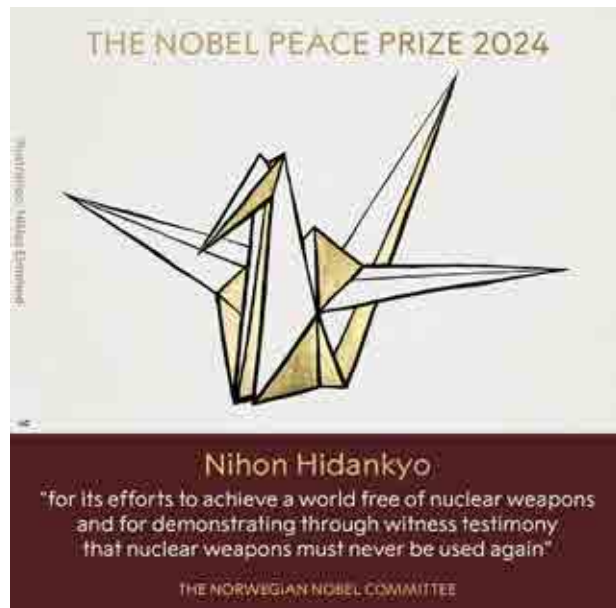
長崎と広島では、毎年何千もの人々が集まり、原子爆弾の犠牲者を追悼します。この式典は8月6日には広島原爆死没者慰霊碑の前で、そして8月9日には長崎の平和公園で行われます。また、それ以外の日にも多くの人々、特にたくさんの中高生がこの場所を訪れ、犠牲者や過去の出来事を追悼しています。

追悼式典や記念碑は、犠牲者やその遺族にとって慰めとなるものであり、戦争で命を落とした方々や苦しみを経験した全ての人々への敬意の表れでもあります。

歴史に目を向け、犠牲者を追悼することは、戦争によって命を奪わ

れた何百万もの罪のない人々がいたことを私たちが忘れないようにするために、とても大切なことです。また同時に、平和を守り続ける責任は私たち一人ひとりにあることを思い起こさせます。私たち一人ひとりが常に警戒を怠らないようにし続けなければなりません。

平和と正義への希望を決して諦めてはなりません。追悼式典は、その希望と、全ての人々の平和への強い願いを表すためにあります。しかし同時に、平和・自由・安全の大切さを改めて認識し、私たち自身の責任が問われる機会でもあります。



授賞理由:核兵器のない世界の実現を目指して尽力し、核兵器が二度と使われてはならないことを目撃証言を通じて身をもって示してきた。

2024年のノーベル平和賞は、日本原水爆被害者団体協議会(日本被団協)に贈られました。協会の会員は広島と長崎の原子爆弾の被害者です。彼らは平和と核兵器のない世界の実現のために現在でも尽力しており、核兵器がもたらす被害について自身の経験をもとに語りつないでいます。



「希望」像
Ergo Linde
個人所蔵

この本は、その責任を考える一助となり、特に若い世代が戦争と平和について考えるきっかけとなることを願っています。

戦争は遠いところの話のように感じるかもしれませんが、過去から何も学ばなければ、戦争はすぐに近くまでやって来るのです。過去の出来事は、私たちは常に不平等や不正が起きないように警戒していなければならないことを教えてくれます。また、権力に貪欲な集団や指導者がその状況を利用し、人々を欺き、あおり、ついには戦争へと駆り立てて多くの人々を深い苦しみに陥れることにならないように見張っていなければなりません。

過去はまた、戦争がいかに無意味であるかを私たちに教えてくれます。戦争には勝者などおらず、全ての人が敗者となります。特に、最も大きな犠牲を強いられるのは一般の人たちなのです。ですから、最後に元ドイツ連邦大統領のリヒャルト・フォン・ヴァイツゼッカーの賢明な言葉を紹介します。

私たちは過去を変えることはできない。しかし、未来を変えることはできる。

過去に目を閉ざす者は、現在に対しても盲目となる。

おわりに

著者は、インゲ・デュンペル(Inge Dūmpel)氏、ヤン・フェルストラテン(Jan Verstraaten)氏、アルテュール・フライリング(Arthur Frijling)氏(福岡第2分所)、レオンティーン・ファン・ダイク=スクラム(Leontien van Dijk-Schram)氏に、本教材の編集および内容についてご協力頂きましたことに深く感謝申し上げます。また、エレン・スクラム=ストルム・ファン・スプラーフェサンデ(Ellen Schram-Storm van 's Gravesande)氏には、厳しい視点をもって助言をいただき、さらには絶え間ない支援を賜りましたことに、心より御礼申し上げます。

さらに、香焼中学校の教職員および生徒の皆様、ならびに取材にご協力いただいた香焼の皆様にも、貴重なご意見をお寄せいただきましたことに感謝申し上げます。また、追悼と和解の過程において多大なるご尽力とご関心を寄せてくださった井原ご一家ならびに「香焼祈念碑維持管理委員会」の皆様にも、心より感謝申し上げます。

日本国内の捕虜収容所に関する知識を広め、遺族の方々が関係する場所を探す際の支援に尽力されている「POW研究会」の皆様には、心からの敬意を表します。

本書は、これまでの版を拡充したものであり、より多くの情報を提供しています。いくつかの点については、以前より

詳しく説明しています。前の版に対して成人の方々からも関心が寄せられたことが、そのきっかけとなりました。

本書は、オランダ健康・福祉・スポーツ省およびフィリップス・コルツ基金の支援を受けて作られました。また、本書の制作に向けてのアルナウト・ハーグ(Arnoud Haag)氏並びにベン・ルフトンベルフ(Ben Lugtenberg)氏の熱意とご貢献にも深く感謝申し上げます。

使用されている画像は、各国の公文書館所蔵のもの、パブリックドメインならびに個人のコレクションから提供されたものです。出典が判明しているものについては、画像が掲載されているページに明記しております。本教材は商業目的ではなく、教育活動を支援するためのものです。

本書のデザインは、ヒルキエ・スクラム=エーレンブルフ(Hylkje Schram-Ehrenburg)氏による旧版のデザインを基に、ルール・ポスト(Roel Post)氏が手がけました。印刷は、ブッスム市にあるワルデン印刷所(www.walden.nl)によって行われました。

本書の内容の一部または全部を、いかなる方法においても著者の書面による許可なしに複製・公開することを禁じます。

本書の著者には、以下のメールアドレスを通じてご連絡いただけます。a.w.schram@me.com

© アンドレ・スクラム 2025年第2版



**STICHTING
DIALOOG**
Nederland - Japan - Indonesië



Stichting
GASTDOCENTEN WO II

